

[体育・保健体育]

かかわり合いをとおして、意欲的に運動に取り組む子どもの育成

－第6学年ソフトバレーボールの実践から－

田邊 輝明*

1 研究の動機

学習指導要領では、運動に興味をもち、活発に運動する者とそうでない者の二極化の顕在化、生活習慣の乱れやストレス、不安感の高まりなどの子どもたちの現状から、「体を動かす楽しさ、心地よさそのものをじっくり体験すること」「やさしいスポーツをとおして、様々な身のこなしが巧みにできるようになること」を基本的な方針として打ち出している。運動をとおして「心を開く」ことにより、心と体の一体化を図っていこうというものである。

また、新潟県保健体育課の「運動・体育授業の好嫌度に関する調査」によると、学年が進行するにつれて、「体育嫌い」の子どもが増えているということである。それに対して「運動嫌い」の子どもは学年の進行と関連がないという結果が出ている。「運動好きの体育嫌い」という傾向が見られるようである。私自身の反省を含め、このことの意味を考えていくと、次のような点が考えられるのではないか。

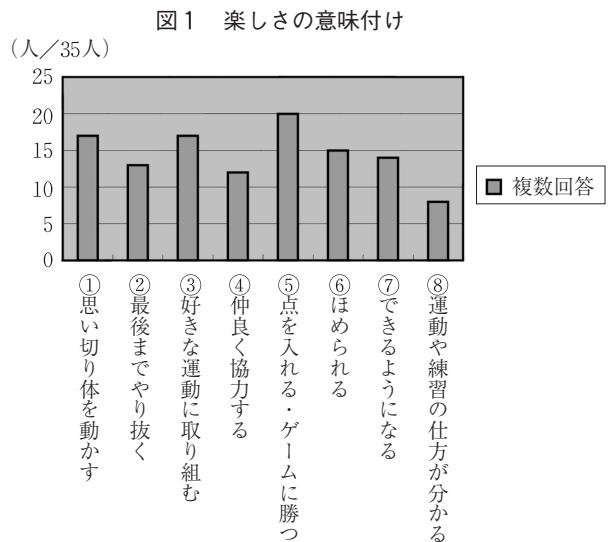
- 学年があがるにつれて、既成のルールや運動の構造から、ある程度のゲーム像が子どもたちや教師の中に固定化され、それに向けて授業が展開されている。そのため、特定の子ども（技能が高い子どもや運動経験が豊富な子ども）によって運動が進められていることが多い。
- 「知識」や「技能」をいかに教え込む（「できる・できない」）かを目標にした学習活動が中心であったため、失敗をおそれ、「からだを思い切り動かすことの心地よさや楽しさ」を十分に味わえきれていない。
- 体育学習の中で、運動自体がもつ楽しみを感じ取るというより、運動は健康増進や体力増強のために行うといった傾向が強い。
- 運動の「学び方」への焦点付けが弱く、子どもたちが主体的に運動を創り出していく機会が少ない。

生涯にわたって意欲的に運動とかかわっていく子どもたちを育てていくためには、子どもたちが運動することの意味を見出したり、運動の楽しさを自ら見つけ出していくような授業改善が望まれる。

2 主題設定の理由

(1) 子どもの実態から

明るく、活動的な6年生（男子17名、女子18名、計35名）の学級である。本単元に入る前に、「どんなところに運動の楽しさ」を見出しているかアンケート調査を行った。結果は、図1の通りである。ポイントが高かったのは、「①思い切り体を動かす（活動）」「③好きな運動得意な運動ができる（開放）」「⑤点を入れる、競争に勝つ（競争）」であった。逆にポイントが低かった項目は、「④みんなで仲良く協力する（協同）」「⑧運動や練習の仕方が分かる（学び方）」である。この結果から、今までの体育学習で仲間と協力して楽しむ経験が十分味わえていなかったこと、課題などが一方的に与えられたり、一人一人の思考や集団での思考の機会が少なかったりしたため、「学び方」を知らないという実態が浮き彫りになってきた。



* 長岡市立四郎丸小学校

(2) 運動の特性から

① ソフトバレーボールの一般的特性

ソフトバレーボールは、「ニュースポーツ」の一つとして学校体育の中に取り入れられてきたものである。京都教育大学教授：杉本厚夫氏によると、ニュースポーツとは、これまでの近代スポーツとは違った考え方のもとに展開されるスポーツであり、「いつでも、どこでも、誰とでもできる」「競争ではなく、共創する」スポーツである。また、「スポーツに人間を合わせる」のではなく、「人間にスポーツを合わせる」等身大のスポーツでもあると唱えている。また、岡山大学教授：大橋美勝氏は、競争的スポーツを『競争の原理』ではなく『共生の原理』に基づいてプレイするものがニュースポーツであると唱えている。

これらの点から、ソフトバレーボールの一般的特性は次のような点があげられる。

○ 簡単なルールや技能で、誰でも気軽に楽しめる運動であり、ネット対陣型のため、チームでまとまってゲームをすることができる運動である。

② 子どもからみた特性

- ・ボールが大きく・軽く・柔らかいため、パスが安全にしかも容易にできる。そのため、難しい運動技能が伴わなくても運動を楽しめる教材である。
- ・ネット型のゲームで、攻守が入り乱れることがないので、作戦を工夫しやすく、誰もが得点する喜びを味わうことができる。
- ・ミスがそのまま失点につながることが多い。それをカバーするための、仲間同士の教え合い、励まし合い、共感などがプレーの中で生まれやすい。

3 研究の目的

今までの体育学習では、集団的スポーツであればステージ型、個人的スポーツであればスパイラル型という単元構成で授業が進められることが多く、子どもたちは運動の機能的特性（運動に内包されている楽しさや喜び）にふれるだけで終わっている傾向が大きかったのではないだろうか。子どもたちにとって運動は、教師によって用意されたものという意味合いが強いものであった。

今日の学校体育に求められている「生涯にわたって意欲的に運動にかかわっていく子ども」を育てていくためには、従来の機能的特性を重視していくことに加えて、子どもたちが「モノ（＝用具・場づくりなど）」「仲間」とのかかわり合いを楽しみながら、「運動の学び方」を自ら体得していくことが重要である。そこで、本研究では高学年ボール領域に加えられたソフトバレーボールの学習を通して、その可能性を検証していくことを目的とする。

4 研究の内容と方法

今回は、「ソフトバレーボール」（ボール運動）を研究対象とし、以下の方法で実践を行い、研究目的が達成されるようにしていきたい。

(1) 子どもたちが自ら「運動の学び方」を体得できる工夫

① 「モノ」「仲間」とのかかわりから学習の進め方を主体的に考えたり、工夫したりする

「学び方」の内容とは、すべての子どもが運動の楽しさにふれることができるよう、運動学習の進め方を主体的に考えたり、工夫したりして、めあてをもって学習することである。このことは、学習指導要領改訂により、教育課程全体の基本方針として、「生きる力」や「課題解決力の育成」が強調されたことに関係している。体育においても、「学び方」は、生涯にわたって運動を合理的に実践していくために不可欠な能力と考えられる。

本研究では、従来の集団的スポーツであれば、ステージ型という単元構成にこだわらず、子どもたちが「モノ」「仲間」とのかかわりの中で、学習の進め方を考え、工夫し、創り上げていく中で、自らの運動の課題を解決していきけるように工夫していく。

② 用具や場づくりを子どもたちが自ら考えたり、工夫したりする

体育学習において、用具や場づくりという要因は、子どもたちが学習の中で一番思考をはたらかせることができる場面であり、運動の楽しさ、運動自体のもつ気持ちよさや競争へのこだわりを楽しむことと深く関わってくる。

特に、ソフトバレーボールの学習は、チーム編成・ボール・コート・ネットの高さ・ルールなど、他のボールゲームと比較するとより多くの工夫が可能な運動である。そこで、本研究では、子どもたちが自らの手で選択しながら、運動の意味付けを子どもたちの手で行っていきけるような時間と場を設定していく。

(2) 自分と仲間とのかかわりや心の動きに気付く学習カードの工夫

チームの仲間や競争相手とのかかわり合いを楽しみ、仲間と競争することの意味や運動の楽しみ方・競争へのこだわりを学び取っていきけるよう自己評価と相互評価を適切に行っていく。学習カードは、自由記述できるものを用意し、毎時間コメントを加え、次の学習に生かすことができるようにする。

また、学習中の動作や表情などから、子どもたちの心の状態を読み取り、適切な助言を与えたり、個人やチームのめあてにそった学習活動が展開されているか観察し、必要に応じて指導・助言したりする。

5 研究の実際

(1) 単元全体の構成図

次	時	学 習 活 動	支 援 ・ 留 意 点
1	1	ソフトバレーボールを使って運動を楽しむ ○ ソフトバレーボールを使ってできる運動をみつける ・一人でトス ・サーブ練習 ・二人でトス ・円陣パス ・どこまで高く打てるか ・ミニゲーム ○ ソフトバレーボールを使って運動を楽しもう ・1対1のゲーム ・2対2のゲーム ・ネットをはさんでのミニゲーム	<ul style="list-style-type: none"> ◆ ボールのちがいによって、運動の楽しみ方を見出せるよう3種類のボールを用意する。 ◆ 子ども自身による学習のプロセスを大切にす。また、なぜその運動をしたかなど学習カードに記入するようはたらきかける。 ◆ 巡視しながら、活動が停滞している場合には、いくつかの活動の選択肢を助言する。
2 (3時間)	2	簡単なルールを決め、ゲームを楽しむ ○ 簡単なルール(教師提示)に従ってゲームを楽しむ ・ネットの高さ(160cm) ・ボールの重さ(50g) ・サーブ(バドミントンコート中央からアンダーサーブ) ・パス回数(何回でもよい) ・得点(時間制)	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 基本のルールを提示し、ゲームの様相によって柔軟に組み替えていけるようにする。 ◆ つまずきのあるチームや個人については、助言を与える。 ◆ 「ゲーム」ー「作戦」ー「ゲーム」という形式にこだわらず、1時間の流れを子ども自身が、チームの課題と合わせて決めていけるようにする。 ◆ チームのめあてにあった学習活動が展開されているか見取り、指導・助言・賞賛を与える。 ◆ ビデオなどを活用し、自分たちのプレーを振り返ることのできるよう工夫する。
	3	○ どうしたらゲームが楽しくなるか話し合い、ルールや練習方法を工夫する ・対戦相手との話し合いにより、ゲームの進め方や作戦タイム、練習時間の取り方、ルールなどを決定していく。	
	4	・ゲームは1試合15分を上限とする(1時間で対戦相手2チーム) ・チームと個人の反省をする	
3 (3時間)	5	ルールや攻防を工夫して、自分たちのチームのよさを生かしながらゲームを楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 全員が楽しめるソフトバレーボールを創るためのルールや場づくり、コミュニケーションがとれているかを見取り、指導・助言・賞賛を与える。 ◆ 自分のチームのよさを見つけたり、相手のよさを自分たちのチームに生かしていけるよう振り返りの場面で適切な指導・助言を行う。
	6	・対抗戦形式でゲームを行う。	
	7	・競争の仕方に応じためあてや作戦を話し合い、練習やゲームをする。 ・チームと個人の反省をする	

(2) 子どもたちが自ら「運動の学び方」を体得できる工夫の実際

① 「モノ」「仲間」とのかかわりから学習の進め方を主体的に考えたり、工夫したりする

1次1時間目の「ソフトバレーボールを使って運動を楽しむ」では、「自分」と「モノ(ボール)」との自由なかかわりがスタートとなり、子どもたちは「やってみよう運動」をそこに居合わせた仲間と楽しんでた。この場面では、「仲間」とのかかわりは流動的であり、混沌とした状態であったといえる。

しかし、時間の後半になると、一人で運動している子どもは少なくなった。円陣パスをしていたグループでは、長くトスを続けることができるように円の真ん中に一人配置したり、大きな声で数を数えたりしながら運動を楽しんでいた。また、体育館のラインをコートに見立ててミニゲームを始めたグループもあった。学習時間が進むにつれ、「仲間」の動きや考えに関心が大きくなってきたことが伺える。また、次時に向けて、「ネットを立てたい」という願いが生まれてきた。このことから、子どもたちが「仲間」とのかかわりをとおして、「モノ(コートやネット)」というゲームに必要な条件を自分たちの手で見つけ出していったことがわかる。子どもの感想を紹介する。(資料1)

「高さ」という要因が加わったことで、ミニゲームをしていても長くパスがつかないという悩みに直面し、バレーボール本来のもつ、「ネット型」の特性にふれる姿が見られるようになった。子どもたちの願いから、2次は、

ゲーム中心の展開で学習を進めることとした。

2次1時間目は、初めてのゲームということで、簡単なルールや学習の進め方を教師が提示し、学習を進めた。

ゲームを始めてみると、なかなか試合が盛り上がらない。満足感が得られなかった子どもの感想を紹介する。(資料2)

資料1 子どもの学習カード1

Aさんの提案で、3対3にわかれて床に落とさずにトスし合うゲームをしました。みんなで20回をめあてにやっていたら24回続きました。次にネットを立ててみました。そしたら、ボールがネットに当たって、なかなかトスが続きません。つながらないのでいろいろしてきました。どうしたら長く続けることができるかな。

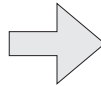
資料2 子どもの学習カード2

今日の試合はつまらなかったです。ボールを1回で返すことが多くてボールがつながらなかったです。ネットが低くて、強いボールがすぐに返ってきました。ネットの高さを高くしたり、サーブのラインを下げたりしたらいいと思います。試合には勝ったけれど、ラリーが続かなくてつまらなかったです。

ソフトバレーボールを始めて2時間目という技能面も起因していると考えられるが、それ以上に、前時までに子どもたちが「モノ」「仲間」とのかかわりで見出してきた、ボールを「つなぐ」といった楽しみ方が教師の提示したルールでは味わうことができなかつたことが大きな要因であると考えられる。そこで、基本のルールや学習の進め方を子どもたちが決めた上で、自分たちに合ったルールをさぐることを学習の次の段階とした。

【教師が提示したルール】

- ネットの高さ：160cm
- ボール：50gのボール
- コート：バドミントンのコート
- サーブ：アンダーサーブ
- トス：何回してもよい
- 得点：ラリーポイントで時間制
- 学習の進め方：ゲーム - 作戦タイム - ゲーム



【子どもたちが話し合い決定した基本のルール】

- ネットの高さ：180cm, 200cmを選択
- ボール：50gのボール
- コート：バドミントンのコート
- サーブ：アンダー、オーバーサーブ
- トス：何回してもよい
- 得点：ラリーポイント
- 学習の進め方：対戦相手と決定（試合途中の作戦タイム、練習タイムなども含む）

3時間目の子どもの感想を紹介する。(資料3)

資料3 子どもの学習カード3

先回のゲームよりネットが高くなったので、できるだけボールを高くあげることを目標にしました。練習では、なかなかボールをあげられない〇〇さんにコツを教えました。今日のゲームは、ボールがうまくつながり、相手とラリーが続いて楽しかったです。試合には負けてしまいましたが、何か「動いた!」という感じがします。

学習を進めるにつれて、徐々にソフトバレーボールの特性を一人一人が見出しはじめている。最後までボールを追い、仲間につないだことに喜びを感じ、相手チームとゲームを楽しむ姿がみられた。

3次では、子どもたちは2次までの学習経験を生かし、対抗戦形式で学習を進めていきたいと申し出てきた。対抗戦形式では、ルールを相手チームと相談して決めていく。

この段階では、相手チームとの競争を楽しむといった視点で「仲間」との交流に重きがおかれてきた。運動の特性にふれながらルールをさらに深化させている姿も見られた。

② 用具や場づくりを子どもたちが自ら考えたり、工夫したりする

ア チーム

8チームのキャプテンを募った。その結果、運動能力にかかわらず、「仲間とゲームづくりを楽しみたい」という子どもが集まった。次の観点でキャプテン会議を行い、筆者立ち会いのもとメンバーを決めていった。

- 男女のバランスをよくする
- 身長がどのチームも平均化されるようにする
- 仲間関係が広がりを見せるようなメンバー構成にする
- ソフトバレー経験者を分ける

全てにおいて、チームの編成を子どもたちに委ねたことによって、キャプテンの中には責任感が生まれた。ゲーム中の作戦会議や相手チームとの話し合いの場においてリーダーシップをとり、メンバーと楽しさを追求していこうとして

いた。

イ ボール

30g, 50g, 100gの3種類のボールを学級の人数分用意した。軽くなるほど、落下スピードが遅くなり、触感がやさしい。コートの上さとも関連してくるが、ゲームが進んでくると30gのボールでは軽すぎて遠くまで届かないことに気づき、2次からは、ほとんどのグループが50gのボールを使用していた。3次の対抗戦では、100gのボールを使用したチームもあったが、落下スピードが速く、ボールをつなぐことが難しかったため、最終的には50gのボールをすべてのチームが使用した。

ウ コートの広さ

1次のミニゲームをはじめた頃には、30gのボールを使う子どもが多かったため、狭いコートでミニゲームという様相がみられたが、ボールの重さが50gに固定されてくると、バドミントンコートが子どもたちにとってソフトバレーボールの特性を味わうには一番よいコートの広さとなった。

エ ネットの高さ

2次の1時間目を終えた段階で、30/35名の子どもたちが「ボールをつなぐ」ことに楽しさを見出している記述がみられた。教師が提示した160cmでは、ネットが低すぎて、ほとんどラリーが続く様相はみられなかった。そこで、180cmと200cmに調節ができる補助具を提示し、対戦チームと相談して高さを決定することにした。

ネットの高さを上げたことによって、自然とボールを上へ上げるという意識が芽生えた。また、相手チームとの楽しみ方に応じてネットの高さを工夫する姿もみられた。3次では、ネットを斜めに張った場をつくり、誰もが「つなぐ」「打つ」といった楽しみを味わうことができるように工夫していた。(資料4)

オ ルール

チームで練習は行ったが、なかなかサーブが思うようにできない友達には、「サーブは3回まで」という個人へ対応したオリジナルルールが設けられた。また、ネットの高さを上げたことにより、オーバーサーブでも十分拾って、つなげることがわかり、サーブはオーバー、アンダーどちらでもよいことになった。また、ボールと目線の関係で、オーバーサーブの方が、子どもたちにとってはやりやすいという結果も得られた。

2次3時間目のゲームにおいて、ワンバウンドも認めるというオリジナルルールを作ったチームがあった。「つなごうことが楽しい」「動きがでてきた」という感想が両チームの中には多く、次時の最初に両チームのキャプテンがワンバウンドのよさを紹介するなど、仲間とルールを交流する場面もみられた。

また、3次1時間目からは、ボールを全員がふれたいということから、ローテーションを採用するチームが増えた。ローテーションをしながら、自分たちのチームの一番いいフォーメーションを見つけていくといった記述も学習シートから読み取ることができた。フォーメーションについては、ほとんどのチームがはじめは正方形だったのに対して、ダイヤモンド型(ひし形)、1-3型(前衛1人、後衛3人)、3-1型(前衛3人、後衛1人)など様々な工夫がみられた。

6 実践の考察

単元終了後、子どもたちが「ソフトバレーボール」をどのように思うかアンケート調査を行った。すると図2のような結果が得られた。

初めての運動であったが、90%以上の子どもたちが、ソフトバレーボールを好きであると答えている。そこで、子どもたちが楽しさの意味をどこに見出していたか調査したものが次ページの図3である。

学習前と比較してみると、「②最後までやり抜く」「④仲良く協力する」「⑧運動や練習の仕方が分かる」の項目でポイントが大きく増加していることが分かる。

資料4 子どもの学習カード4

今日は相手チームと話し合いネットを斜めに張ってゲームをしました。こうすると、つなぐことや打つことが両方楽しめるからです。今日は低い方から強く打つことができうれしかった。次の時間は、高いネットの方からも強い球が打てるようがんばりたいです。

図2 「ソフトバレーボール」をどう思うか(事後)

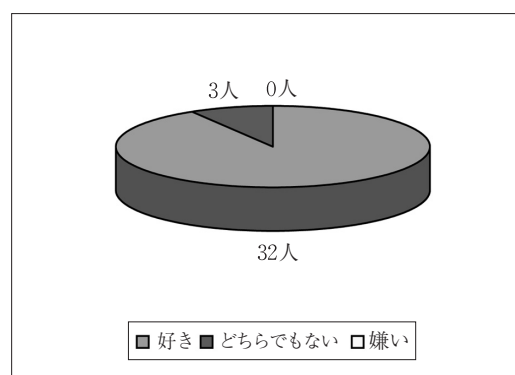
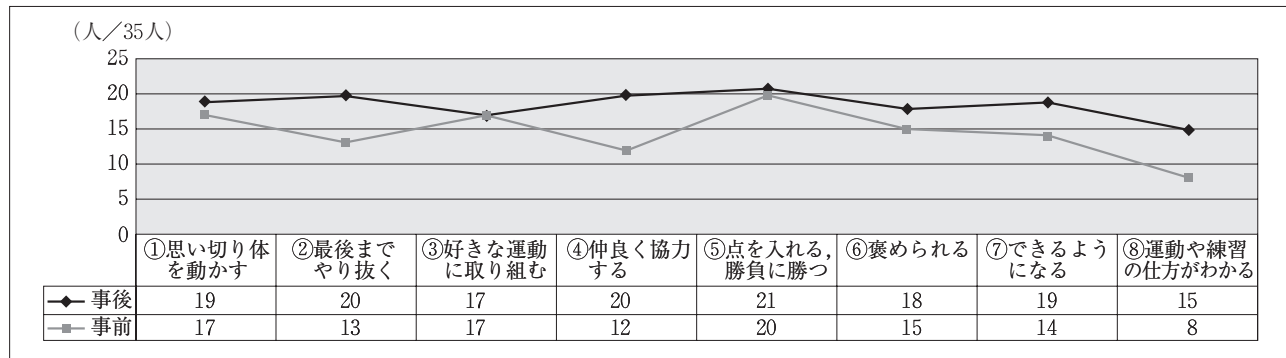


図3 運動の楽しみ方の変容



上記の子どもの変容から、本研究の目的である「意欲的に運動にかかわっていく子どもを育てていくためには、モノ（＝用具・場づくりなど）、仲間とのかかわり合いを楽しみながら、運動の学び方を自ら体得していくこと」がおおむね達成されたといつてよいと考える。

そこで、目的達成に向けて、研究内容と方法がどのように作用したかについて考察する。

(1) 「モノ」「仲間」とのかかわりから学習の進め方を主体的に考えたり、工夫したりする について

従来の学習展開に縛られることなく、「モノ」「仲間」とのかかわりから子どもたち自らが学習の進め方を決定していくように支援した。その結果、ソフトバレーボールのゲームに向けてのネットの高さ、コート広さ、ルールなどについて、子どもたちが納得した上で、意味付けを行い、ソフトバレーボールの運動特性にふれる楽しみ方を見出していくことができた。

また、ゲームの中では、仲間と教え合い、励まし合い、悩み合う中で、子どもたち一人一人が体を動かす楽しさや心地よさ、運動の楽しみ方を味わっていた。

これらのことが、「運動の楽しみ方の変容」の結果にあったような「最後までねばり強くプレーする」「仲間と協力して運動を楽しむ」という意欲的な姿、あるいは「運動や練習の仕方が分かる」といったような学び方の内容にもつながったといえよう。

(2) 自分と仲間とのかかわりや心の動きに気付く学習カードの工夫 について

研究の実際の資料1～4にあったとおり、毎時間ごとに行った学習カードにより、友だちのよさや自分のがんばり、心の動きについて振り返ることができた。また、カードに記載されていた一人一人の声や改善の視点をチームあるいは全体に返すことで、個人に対応したオリジナルルールや練習法、「ネットを斜めに張る」などの新たな視点でのゲームの進め方を子どもたちの手で創り上げていくことができた。

7 おわりに

今後の課題としては、集団的スポーツにおけるサッカー、バスケットボールなど、今まで指導が画一化されている種目においても、本研究で実証された事柄について検証を図っていくことである。このような積み重ねが、より豊かなスポーツライフを創造していくことにつながっていくのではないだろうか。

引用・参考文献

- 文部省 「小学校学習指導要領解説 体育編」, 1999年
 大橋美勝 「ニュースポーツの教材化の視点と学習指導」『学校体育』1月号, 日本体育社, 1997年, 17～19pp
 杉本厚夫 「ニュースポーツ」『学校体育』1月号, 日本体育社, 1997年, 48pp
 細江文利 「子どもの「心を開く」体育とは」『体育科教育』11月号, 大修館書店, 2000年, 14～17pp
 松田恵示, 山本俊彦 「かかわりを大切にしたい小学校体育の365日」, 教育出版, 2001年
 杉山重利他 「新学習指導要領による小学校体育の授業 第6学年」, 大修館書店, 2000年